

カーライルのマホメット論を読むサイド

——『オリエンタリズム』への註釋を兼ねて——

岡田 俊之輔

トマス・カーライルは將來の賢夫人ジェイン・ベイリー・ウエルシュに宛てた一八二三年四月十四日附の書翰で、エドワード・ギボンの大著『ローマ帝國衰亡史』に觸れてゐる。トマスの勸めに従ひ、ジェインは既に同書を読み進めてゐたのだが、この度の文面には、第五十章すなはちイスラームの始祖「マホメット」⁽¹⁾を論じた卷は見事な文業」との所感に加へ、續けて次のやうな忠告も書き添へてあつた。「見ずに濟むなら、註は決して見ないやうに。大抵は實に忌はしいものなのよ」(CL 2330)。

ギボンの本文には、例へばかういふ件りがある。「マホメットが色情を抑へられなかつたといふ事は、彼の自然的もしくは超自然的な資質についての言ひ傳へを聞けば、或は酌量の餘地ありとされるかも知れぬ。何せ男としての力量を、アダムの子供たち三十人分も併せ持つてゐたといふのだから」(380)。これだけでも淑女にとつては十分「忌はし」かつたであらうが、一方「註」のはうはどうかといふと、こちらはラテン語文献から原語のまま爲される引證もあ

つて、それゆゑ一般の英語讀者にはその「忌はし」さが目立ちにくい。當該の註記中、ラテン語の箇處をとある版の註釋に頼りつつ讀へて譯出すれば、「彼は男三十人分の性交能力を持つてゐる事を誇つた。それでたつた一時間の内に十一人の女を満足させる事が出来た」のであり、またマホメットの歿後、遺骸を洗つてゐた女婚アリーは驚歎してかう叫んだといふ、「おお預言者よ、汝の男根、天に向ひて勃起せり」(Lentin and Norman 853, n. 162)。

カーライルの忠告も宜なるかなと言ふべきだが、この「見事な文業」と評されたギボンの史書、確かに客觀的で好意的なマホメット評も散見するものの、やはり總體的に見れば、このイスラームなる一神教の預言者にしてアラビア全土の平定者は「その私利私慾と宗教とが分ち難く結び附」き、晩年は「野心」の虜となつた「勝ち誇れる詐欺師」ではないか (Gibbon 377)、といった印象を讀者に抱かせずにはおかない。いやギボンに限らず、これは西歐一般の傳統的なマホメット像であつたと言へよう。古くは中世人ダンテの『神

曲』「地獄篇」第二十八歌が以下の如く描いてゐる。

たがのはづれた酒樽さかだるにしても、

私が見た男ほど眞まこと二つに割れてはゐなかつた。

彼は頤わがひから尻へをひるところまで裂けてゐるのだ。

脚の間には大腸がぶらさがり、

呑のみ込んだ食物を糞ふんにする

不潔な〔胃〕袋やはらわたも見えた。

私が夢中になつて彼を見つめてゐると、

彼も私を見返し、兩の手で胸の傷口を開いて、叫んだ、

「さあ、俺が俺の體をどうやつて引き裂くか見ておけ！

めつた斬りにされたマホメットがどのやうなさまか見ておけ！

俺の前を泣きながら行くのはアリーだ。

頤わがひから額の髪かみの生え際まで顔を眞二つに割られてゐる。

おまへがここで見かける奴はみな生前

中傷ちゆうじやうをこととし分裂禍根かこんの種まを播まいた。

だからこんな風に割られてゐる。〔後略〕(二七七〇)⁽³⁾

後略した箇處にはマホメットの好色ぶりを難じてゐると思しき詩

行もあるが、ここに云ふ「分裂禍根の種を播いた」とは、クリスト

教世界から見れば異端としか思はれぬ禍々しい新宗派を興して一神

教的世界の分裂を畫策した、の意である。かうした見方は二十世紀のカトリック著述家ヒレア・ペロックもなほ共有する所であり、その著『大いなる諸異端』に一章を割いて「モハメッドの大いなる、そして永きに互る異端」を論じ(571-58)、この開祖の事を「恐らく非常に確信に満ち、また恐らくは少々氣の狂つた男、築き上げる能力なぞ決して示す事が無かつた男」と斷じてゐる(58)。とまれ西洋に蔓延るこの種の「イスラームやオリエントに關する議論と理解に特有の表象的言説」、つまり「普遍にして永遠なるクリスト教的價值體系」が絶對視されるその一方で、例へば「モハメッドは詐欺師である」といふ事が繰返し繰返し事實として説かれ續け、つひには「モハメッドの名が出て來る時はいつでも」さう看做す事が當然とされてしまふやうな社會的認識の枠組、すなはちエドワード・サイードの所謂「オリエンタリズム的言説」(Orientalism)——カールライルが『英雄崇拜論』の第二講「預言者としての英雄——マホメット、イスラーム」で打破しようとしたのも、正にそれであつたと言つてよからう。⁽⁴⁾講話の枕を振つた後、本題に入るや、先づその事に觸れてゐる。

吾々の間に流布してゐるマホメットについての臆説、彼は策

略に富んだ詐欺師であり、虚偽の權化であつた、彼の宗教は單

なるいんちきと馬鹿々々しさの塊に過ぎぬ、といふ臆説は、今

や何人にとつても支持し得ぬものと實際なり始めてゐる。かう

した嘘偽りは、「クリスト教の立場から」良かれと思つて發せられた「護教の」熱情がこの男の周りに積み上げてしまつたものだが、吾々自身にとつては只々恥辱でしかない。「中略」そんなものはもう本當に一掃すべき時なのだ。(3839)

敵對するイスラームを貶す事によつてクリスト教の優位を説かうとする西洋の行き方を明確に「恥辱」と斷じ、マホメットはペテン師どころか偉大な英雄にして神の使徒であると辯じたカーライルは、その點、ヴィクトリア朝の當時に在つては類ひ稀な文人であつた。彼の母校でもあるエディンバラ大學のイスラーム學者モンゴメリ・ウォットによれば、カーライルは「洋の東西を問はず、イスラーム創始者の内的體驗を見抜かうとした最初の物書き」であり、その論攷は「中世及び近代の全ヨーロッパ文學の中で、ムハンマドは眞摯なりと信ずる心を初めて強く肯定したもの」だといふ(253, 247)。また吾國のイスラーム學者井筒俊彦も、舊制中學の頃『英雄崇拜論』を「讀んで大いに感激した」思ひ出を語ると共に、カーライルの「情熱的確信の發露」が西洋人のマホメット觀や『コーラン』⁽⁵⁾觀に「非常な影響を及ぼし」た結果、イスラームに關する「ものを見るみんなの目、ものを評價する仕方がだいぶ變はつ」たといふ事實を指摘してゐる(七・二八三)。

かうしたカーライルの斬新なマホメット論を、「オリエンタリズム」研究で名を揚げたサイードはどう見たか。正に彼の關心に打つ

て附けの題材ではなかつたかと思はれるが、その邊は『オリエンタリズム』の第二章第三節に窺ふ事が出来る。分量にして一段落、長過ぎるといふ程でもないし、後の論述の叩き臺にしたから、以下に全文を譯出するとしよう(なほ便宜上、一文毎に改行し、各文頭に丸數字を振つておく)。

① 「フランスの東洋學者アルマン・ピエール・コーサン」「ドゥ・ペルスヴァル」の描いたモハメッド像に對するに、非専門家による類似版としては「同年生れの」カーライルのものがあるけれども、それは預言者自らの生きた時代や場所といふ歴史的・文化的狀況を完全に見落した或る命題に服するやう強ひられる、さういふモハメッドの姿である。

② 「一世代前のフランス人東洋學者アントワーヌ・イザーク・スイルヴェストル・ドゥ・」サスイを引用してゐるが、カーライルの評論は明らかに、眞摯、英雄的資質、預言者たる事などに關する幾つかの一般概念に贊成の論陣を張らんとする者の作物である。

③ 彼の受止め方は(不快な點はあれど)爲になる——曰く、モハメッドは凡そ傳説上の人物でもなければ、汚辱に塗れた好色漢でもなく、鳩を仕付けて自分の耳から豆を啄ませ「恰も天使からのお告げを受けてゐるかのやうに見せ掛け」たなどといふ嘘すべきちやちな魔術師でもありはしない。

④ いや寧ろ彼は眞の先見の明と自己確信の持主、とはいへ『コーラン』なる書物を作り出した人物でもあるのだが、その本たるや「退屈極まる亂雑なごた混ぜ、粗雑で生硬。無限に續く繰返し、長たらしさ、纏れ。粗雑にして生硬この上なし——要するに、堪らぬ愚昧」なり、と。

⑤ 自らも明晰や文體の美しさの鑑ではなかつたにせよ、カーライルがかうした事どもを力説するのは、モハメッドをベンサム流の規範から救ひ出すためであつた——それに照らせばモハメッドも自分も共に糺弾されたであらうやうな規範から。

⑥ しかしながらモハメッドは英雄といつても、マコーリー卿の有名な一八三五年の「インドの教育に關する」覺書に於て水準に達せずと看做された、正にその野蠻なるオリエントからヨーロッパへと移植された英雄でしかないのであり、そしてその覺書では、「吾等の土人臣民ら」が吾々から學ぶべき事のうちが、吾々が彼等から學ぶ事よりも多い、との主張が爲されてゐた。(152)

註釋を交へつつ、以上を少しく詳細に検討する。先づは①だが、コーサンについてサイドは一つ前の段落で論つてをり、要は當時のアラビアの實情を無視して歪なマホメット像を描いたとの批判である。「専門的なオリエント學者」としてコーサンは、②のサスイを始めとする先人たちが蒐輯した素材から、厩大にして微細な繼ぎ

接ぎ細工により偏頗矮小なるマホメット像を作り出した、すなはち「測り知れぬほどの宗教的威力」その他を剥ぎ取られた預言者は専ら政治運動家として捉へられ、その宗教も「精神的」ならぬ「本質的に政治的な道具」として扱はれるのみだといふ(151-52)。そしてイスラームに關しては素人たるカーライルも、當時の「歴史的・文化的狀況を完全に見落し」てマホメットを論じてゐるといふ點では同斷だとサイドは見る譯である。ここでコーサンの仕事について論評する事は私の手に餘るが、カーライルのマホメット論について言ふならば、基は時間を限つて行はれた講演だつたといふ事(本稿に用ゐた版換算で僅か三十頁)、それに始めから別段包括的な専門研究を目指したものでもない事、更には抑も「偉人」の「精神狀態の正に内奥を見抜く」事にこそ主たる狙ひがあつた事(HHW 37)、さうした諸々を考慮に入れると、オリエント學專攻でも何でもない異文化圏の文學者にしてはかなり「歴史的・文化的狀況」を踏へながら、聴衆或は讀者にそれらを感じさせるべく巧みな表現に仕立てて論を展開してゐるやうに思はれる。アラブの民族性やアラビアの風土から説き起し(41)、偶像崇拜はびこる都市メッカの多神教とその疲弊ぶり(43)、名家クライシユ族に生を享けたマホメットの暮し(46)、彼の召命體驗、及びそこから導出される偶像破壊と一神教信仰(48)、そしてそれゆゑの先祖傳來の宗教との必然的背馳に觸れながら(51)、宣教の一大轉機となつた西暦六二二年のヒジュラ、すなはちメッカからメディナへの「聖遷」に

イスラーム共同体の紀元を求めるといふ話や(52)、萬人の完全な平等を唱へるこの宗教の意義を語つて(63)、つひには「デリーからクラナダまで」の一大廣域が同じ信仰の焰で燃え立つに到つたその次第を鮮烈に描き出す(90)。たつた三十頁の紙幅にこれだけの「歴史的・文化的狀況」を盛込めば、もうそれで必要にして十分ではないか。しかもそれがマホメットの内面を知るための重要な手掛りともなつてゐるのだから、よほど特殊な角度から眺めるのではない限り、「歴史的・文化的狀況を完全に見落した或る命題」のせいで預言者像が振ち曲げられたとは殆ど感じられまい。

さはさりながら、カーライルの主要な關心が特定の「歴史的・文化的狀況」よりは寧ろマホメットの「眞摯、英雄的資質、預言者たる事」に象徴されるやうなもつと一般的な「命題」のほうにあつたといふ事は、サイドが②に指摘するとほりである(『英雄崇拜論』所收の他の諸篇もその點は同じ。但し、各主人公を單なる出しとして使ひ捨てにしてゐる譯では全くない)。また「サスイを引用してゐるが」といふ字句には、文脈から云つて、具體を利用しながらも抽象に傾き過ぎて(コーサンとはまた異なる形で)實地から游離してゐるとの批判的な意味合ひも籠められてゐよう。が、サイドの持論からすれば、抑もサスイにしてからが既にしてオリエントの實像を歪めてゐるのであり、正に「客觀的構成(オリエントを直に明示するもの)」と「主觀的再構成(オリエンタリストが成り代つてオリエントを表象したもの)」との混同を招いた元兇なのだから(○

カーライルのマホメット論を読むサイド

129) してみれば、さういふサスイに凭れ掛らなかつたカーライルは卻つて稱讚されて然るべきではないのか、いやいや、もしかしたらサイドも實はさう取つてゐるのか……といった聊かややこしい話になる。確かにテキスト上でカーライルがサスイの名を擧げてゐるのは唯の一箇處だけ、それもカアバ神殿の有名な「黒石」は石質隕石の可能性もある」などといふ瑣末な事柄を特に出典も示さず紹介する件りのみであるから(HHW 43)、これは「副次的な點」に過ぎぬとするモンゴメリー・ウォットの評にも頷ける(53)。ところがその後の研究によりデイヴィッド・R・ソーレンセンは、カーライルのマホメット論が實は要所々々でサスイの餘り知られてゐない(恐らくはサイドもウォットも未見の)マホメット小傳から「深甚なる影響」を受けてゐる事をカーライルの未公開書翰から突き止め、例證したのであつた(54)。サイドに言はせれば、サスイは單純化により「オリエントを一種の肉體的に平板な状態に墮さしめ」ようとした首謀者の一人といふ事になるが(○150)、少なくともカーライルにとつてはさうではなかつた。つまり、預言者マホメットは「平板」ならざる偉大な英雄なりといふ「命題」に「賛成の論陣を張」るに當り、例へばギボンからは得られなかつたやうな貴重な論據を、カーライルはサスイの小品中に探り當てたのである。尤もこれとて、「オリエンタリズム」感染症による共鳴關係とでも名附けられ、片附けられてしまひさうな氣はするが…。

③に移らう。ここに「(不快な點はあれど)爲になる」と譯した

部分、サイドの原文では 'salutary' という形容詞だが、大方の英語辭典が定義してゐるやうに、「たとひ始めは厄介、乃至は不快に見えるかもしれないとしても、役に立つ、爲になる」といふやうな意味である。「不快な點」とは就中④の後半に引いてあるカーライルの『コーラン』評を指す事は言ふ迄もないが、とにかく③の文章はカーライル本人の言を素直に書き寫したやうなもので、そこに轉記者の否定的な意圖の如きは凡そ窺はれない。但し、「鳩を仕附けて自分の耳から豆を啄ませ」云々は頗る不親切な提示の仕方と言はざるを得ず、補註が無ければ一般讀者には何の事やらさつぱり解るまい。これはマホメット山師説に異を唱へる既に引いた一節の、ちやうど中略部分に出て來る話で、十七世紀イギリスの東洋學者エドワード・ポウコックがオランダの法學者兼神學者グロティウスに對して、時に、マホメットは自分の耳に餌欲しさで嘴を突つ込む鳩の仕草を、天使が預言者にお告げを授けてゐる姿に見せようと企んだらしいが、その話の證據は一體どこにあるのかと訊ねたところ、この「國際法の父」は「證據など無い」と答へた、といふもの (HHW 3839)。事程左様にマホメットには根據無き俗説が附いて廻つてゐるのだと訴へるべく、カーライルは典型的な一例を擧げた譯である。續く④も出だしはカーライルの見解の轉記に留まるが、先に記したとほり、その後は明らかに不快感を伴ひながらの原文引用である。「退屈極まる亂雑なごた混ぜ、粗雑で生硬。無限に續く繰返し、長たらしさ、纏れ。粗雑にして生硬この上なし——要するに、堪らぬ

愚昧 (insupportable stupidity, in short)——確かにカーライルは『コーラン』をかう評してをり、この直前には、「私はこれ程までに骨の折れる讀書は未だ嘗てした事が無い、と言はねばならぬ」と、また直後には、「義務感でも無ければ、如何なるヨーロッパ人もコーランを讀み通す事は出來まい」と率直に述べてゐる (56)。カーライルに批判的な人士はこの「堪らぬ愚昧」といふ表現を殊更に問題視する傾向があるけれども、普通に考へてみれば、『コーラン』に馴染の無い非アラブ乃至は非ムスリムの讀者にとつて、これは極く當り前の感想ではあるまいか。それに何より、この評言は一冊の書籍として見た『コーラン』の構成 (例へば敘述の順序と出來事の時系列とが概ね逆轉してゐる事など) に關する専ら「文學的」な感想なのであつて、中身に關する道徳的・宗教的批判ではないのだから、そこを無視して酷評を加へる事にさほど意味があるとは思はれない。その點、以下に引く井筒俊彦の發言は示唆に富む。

要するにカーライルには、『コーラン』を生きた形で讀み、生きた形で理解するための「讀み」の技術が缺けてゐただけのこと。『新約聖書』でも讀むやうなつもりで、それとまつたく同じ態度で『コーラン』を讀むから、退屈でつまらないといふことにもなりかねないのである。「中略」これを讀むには、佛典や聖書を讀むのとは違ふ一つの特種な「讀み」のテクニークが必要である。(七二六四八)

その「テクニーク」については井筒の著作に譲るとして、ここまでは一つだけ、彼が「どうしてもちよつと言及しておかなくてはならないスタイル上の特徴」と指摘する「押韻散文の形式」(七二六四)、それに關聯してカーライルが感じた事を紹介しておかう。彼は『コーラン』を十八世紀イギリスの東洋學者ジョージ・セイルによる英譯版で讀んだが、幾ら譽れ高き「名譯」であらうと、翻譯で讀むこと自體に抑もの限界があるのではないかと感知してゐた。アラビア語の「原文では、一種の高らかなる詠唱歌」になつてゐて「韻律がある」と聞くけれど、「もしかしたらその點、多くがこの翻譯では失はれてしまつたのかも知れない」と(HHW 56)。やはり文學者として觀るべきものは確と觀てをり、この直觀は専門家の見解とも一致するものである。井筒によれば、西歐のイスラーム學者 C・R・ノースもかう書いてゐるといふ。

コーランは翻譯で見ると實に冗漫で讀むに堪へないが……アラビア語で讀むと、決してつまらぬ本ではない。コーランは一種の韻をもつた散文で書いてあり、それがまた、殆ど全ての單語が三個の語根子音から規則正しく派生されるアラビア語には素晴らしく適合してゐるのである(四二〇一に引用)

ところで井筒の言葉を藉りれば、ノースは「常にイスラームに對

カーライルのマホメット論を讀むサイド

して一種の偏見を放棄し得ぬ」學者だつたさうで(四二〇一)、それは『コーラン』の英譯者セイルにしても同じであつた。ならば何故わざわざその方面の研究や翻譯に打込むのか。セイルには、イスラームの經典を嚴密に譯し、嚴正な批判を加へた研究を世に問うて、「クリスト教徒の讀者にイスラームは偽りの宗教であると念を押す」だけでなく、延いては「イスラーム教徒をプロテスタントのクリスト教に改宗させる」事にまで役立てようとの目標があつたからだ。英譯の仕事も、英國國教會系の「クリスト教知識普及協會」から委任されたものであつた(Spellberg 637)。このセイルにせよ、或は十七世紀半ばに「マホメットの生涯に十全に露呈せるペテンの實態」なる傳記を書いたハンフリー・プリドーにせよ、かかるオリエンタリスト^らは『コーラン』を「奇術・詐術の類ひを單に束ねたもの」として一蹴し、マホメットの「相次ぐ罪業を辯解・糊塗し、野心といんちきを押し進めるべく捏ち上げられた」に過ぎぬなどと罵詈謗を重ねて來たが、それに對してカーライルは再び訴へる、「そんなものは本當にもう一掃すべき時なのだ」と(HHW 57, 272a)。書物としての結構の觀點からは匙を投げた彼も、「文學的價值とは全く別様の價值」がこの聖典と預言者には間違ひ無く存在すると感得したのである(56)。虚飾に囚はれず物事の實相を見抜く誠實な眼、②にも出て來た「眞摯(Sincerity)」こそがそれであり、眞摯なる預言者にとつて正しく「この神の宇宙は畏怖すべき事實にして實在」であつたといふ事を(58)、例へば次のやうな『コーラン』

の一節に讀取つたに違ひない。第八十一章の冒頭から井筒俊彦による譯註も含めて引用する。

慈悲ふかく慈愛あまねきアツラーの御名において……

太陽が（暗黒で）ぐるぐるの卷きにされる時（頭にターバンをぐるぐる

暗黒が巻きつけられて光りを失ふ時。勿論、天地終末の光景である）、

星々が落ちる時、

山々が飛び散る時、

産み月近い駱駝（アラビア人にとつてこの

時、

野獸ら續々と集ひ来る（恐怖のあまり、みんな一箇所に集つて来る）時、

海洋ふつふつと煮えたぎる時、

魂（こころ）ごとく組み合はされる時（復活のため、いままで離れてゐた、魂が肉體とまた組み合ふのである）、

生理の嬰兒（いさぐめ、みどりこ）（「中略」古代アラビアでは女の子が生れるとそのまま生理めにする風習があつた）が、なんの罪あつ

て殺された、と訊かれる時、

帳簿（各人の行爲が詳細に記されてゐる天の帳簿）がさつと開かれる時、

天がめりめり剥ぎ取られる時、

地獄がかつかと焚かれる時、

天國がぐつと近づく時、

（その時こそ）どの魂も己が所業の（結末を）知る。

誓はう、沈み行く星々にかけて、

走りつつ、瞬（ねぐら）に還る星々にかけて、

駈（しんじ）々と迫る宵闇にかけて、

明けそめる暁の光りにかけて、

げに、これぞ尊き使徒「天使ガブリエル」の言葉。力もた

けく、玉座の主（わ）（ラー）の御前に座を占めた、萬人の従ふべく、

かつ頼るべき使徒の（言葉）ぞ。

これ、お前がたの仲間（マホメツ）は決して、もの憑きなどでは

ない（天使ガブリエルの姿を見たといふマホメツの言葉を聞いてメツ）。「後略」

（二六三―六四）

マホメットを講ずるに當つて様々な既刊書に當つたカーライルであつたが、「歴史的・文化的狀況」についての知見はともかく、やはり「講演の主たる論據はカーライル自身のクルアーン讀書」にあつたと言つてよいだらう（Watt 253）。マホメットの世界觀・宇宙觀に心底共感してゐる様が、以下の如き文言にはつきりと見て取れる。

To [Mahomet's] eyes it is forever clear that this world
wholly is miraculous. He sees what[...] all great thinkers, [...] in
one way or other, have contrived to see: That this so solid-

looking material world is, at bottom, in very deed. Nothing is a visual and tactual Manifestation of God's power and presence—a shadow hung out by Him on the bosom of the void Infinite; nothing more. The mountains, he says, these great rockmountains, they shall dissipate themselves 'like clouds;' melt into the Blue as clouds do, and not be! [...] At the Last Day, they shall disappear 'like clouds;' the whole Earth shall go spinning, whirl itself off into wreck, and as dust and vapour vanish in the Inane. Allah withdraws his hand from it, and it ceases to be. The universal empire of Allah, presence everywhere of an unspeakable Power, a Splendour, and a Terror not to be named, as the true force, essence and reality, in all things whatsoever, was continually clear to this man. (HHW 59-60)

特に譯文を附す事はしないが、読み手によつて名文と感ずる者もあれば眞つ當な英語に非ずと評する者もある。かういふ所謂 'Caricature' を念頭に置いて、サイドは⑤で「明晰や文體の美しさの鑑ではなかつた」云々と當て擦つてゐる譯だが、ここで彼の文章に戻るとしよう。⑤に見える「ベンサム流の規範」と言ふ迄もなく、ジェレミー・ベンサムを謂はば教祖とする、當時の時代精神たる功利主義の思潮を指してをり、時流に抗するカーライルといふサイー

カーライルのマホメット論を読むサイド

ドによる見立ては正しい。大方のイギリス人はクリスト教徒を自稱しながらも、その實、苦痛と快樂、損と得を天秤に掛けて萬事の善惡を測らうとする功利主義哲學に毒されてゐる。神學者にしても同様で、既に前世紀にはウイリアム・ペイリーが神學的功利主義を唱へ出す始末。倫理や宗教を功利の念、すなはち損得勘定で捉へるさういふ言語道斷の風潮に我慢ならなかつたカーライルは、大いに心を搖さ振られた「預言者としての英雄——マホメット、イスラーム」を敢入て演題に選び、ヴィクトリア朝の社會に爆撃を加へたのである。

ベンサム一派のほゞく功利だの、損得によつて決る徳だの、この神の世界を死せる非情な蒸氣機關に墮さしめ、人間の無限にして天上的なる魂を一種の乾草秤に還元し、干し草と藎あやぎを載せて目方を量る如く、快樂と苦痛も載つけて重さを量り較べるだの——もしも人間について、またこの宇宙に於ける人間の運命について、より乞食のやうな誤れる見方をしてゐるのは一體どちらか、つまりマホメットか、彼奴らか、と訊かれたら、私はかう答へよう、マホメットに非ず!と。(35)

「マホメットに非ず!」と言つて、「彼奴らである!」といふ直截な言ひ廻しを避けたのは、もしかしたら、その頃は親しかつた友人ジョン・ステュアート・ミルが聴衆席にゐたからかも知れぬ。「彼

奴ら」の一人と目されるミルは、「より乞食のやうな (Beggarter)」といふ言葉がカーライルの口から發せられるや、その場で憤然と立ち上がり、斷乎「否！」と返した、トリチャード・ガーネットのカーライル傳にはある (171)。因みにガーネットは一八三五年生れだから、英雄崇拜論講演會が開かれた時は満五歳、とてもその場にゐたとは思へず、さりとて何らかの出典を明記してゐる譯でもないので、この實況風の敘述には疑問無しとしないが、さはあれミルが苦言を呈したのは確かであり、それに應じてカーライルは十一日後に開催の第五講「文人としての英雄——ジョンソン、ルソー、バーンス」の中盤で若干の辯明を行つた。友人の氣分を付度したのか、クリスト教徒を自稱しつつ損得勘定に走る中途半端な、どつちつかずの偽善的な手合に比べたら、徹底した功利主義者の方が知的誠實を斷乎貫くといふ點で遙かに立派であると述べてゐる。が、それでも「蒸氣機關」的功利主義に對する批判そのものを撤回した譯ではなく、この計量主義といふ「新たな信仰へのアプロウチ」たるベンサム主義は、成程それはそれで英雄的なものではあるが、やはり人間として眞つ當にものを観るための「具眼、を剝り抜かれた英雄主義」に他ならぬと一刀兩斷する事を忘れはしなかつた (HHW 148.49)。ところで「具眼」の士マホメットも元は商人、秤による計量の比喩は『コーラン』にも見られるが、例へば第百一章に曰く、「秤が重く下つた者」には天國の生活が、他方「秤が軽くはねた者」には底無しながの地獄がそれぞれ待つてゐる、と。無論その秤に掛けられるのは「現

世でして來た善事」と惡事であり (三〇〇)、幾分損得勘定の氣味はあれど、快樂と苦痛は飽く迄も結果として、齎されるものと信じられてゐるのであつて、決してその逆ではない。カーライルがこの章を念頭に置いてゐたかどうかはさて置き、ベンサム主義者よりもマホメットのはうを取るのは至極當然であつたと言へよう。

ここに於てサイドへの吾が註釋作業もやうやく⑥に辿り着いたが、これまでの論述に照らせば、トマス・バビンゲトン・マコーリーの「覺書」を援用したこの手のマホメット論議が、少なくとも『英雄崇拜論』第二講に關する限り、全くの場違いであるといふ事は自づと明らかであらう。^⑥それゆゑ最早くだくだしい註釋も必要あるまいから、一つ脱線して、サイドの英文を吟味する。⑥の末尾は原文では“his famous “Minute” of 1835, in which it was asserted that “our native subjects” have more to learn from us than we do from them.”となつてゐるが、that節の中身全部が直接話法のやうな形で (つまりマコーリー自身の臺詞としてそのまま) 書かれてゐるのならば別に問題は無い。ところが、ずばりそのままの文言が「覺書」内に見附からなかつたものだから、全部を引用符で括つた書き方をする譯にもゆかず、そこで主語のみを引用句にし、後は文脈から判斷して自分の言葉で繋ぎ、間接話法にて文を結んだ、といった所だらう。さて、もしも直接話法で“our native subjects have more to learn from us than we do from them.”と書いてあるのなら、當然“our”も“us”も“we”も總べてマコーリーを始めとするイギリス人、乃

至はヨーロッパ人を指し、文末の‘them’は主語の‘our native subjects’すなはち「吾等が大英帝国の土人臣民ら」を指すから、引用者がインド亞大陸の人民に共感を寄せ、イギリス帝國主義を批判的に見てゐるといふ構圖が明瞭とならう。然るにサイドが實際に書いた英文はどうか。引用符内にある‘our’はともかく、‘us’や‘we’に筆者エドワード・ワデイ・サイド自身は果して含まれてゐるのかゝるのか。いや、ここは文章作法から云つて、含まれてゐるとしか、すなはち自分を「吾々西洋人」の一人と看做して英語の文章を綴つてゐるとしか讀めない筈だが、工夫すればもう少し違つた書き様もあつたらうに、『オリエンタリズム』の著者としてそれではないのか。パレスティナ生れのクリスト教徒といふ微妙な立ち位置の爲せる業と評すべきか。⁽⁷⁾

とまれ、このやうに「オクシデント対オリエンツ」といふ單純な構圖には収まり切らぬものもあるといふ當り前の事を、他ならぬ己れの文章が裏切り示してゐるにもかかはらず、それを強引に收めようとするから論證に破綻を來すのである。⁶で段落が終り、次に新段落が始まるが、その冒頭の一文にサイドはかう書いた。

コーサンもカーライルも共に、言ひ換へれば、次のやうな事を吾々に示してゐる、すなはち、オリエンツを吾々が無闇に不安がる必要は無い、オリエンツの爲し遂げた事なぞヨーロッパのそれには斯くも敵はぬものなのだ、と。(O152)

カーライルのマホメット論を讀むサイド

この「吾々」にサイド自身は含まれるのか含まれないのか、などとさういふ野暮な事はもはや問はないが、とにかく⁵までならまだしも、⁶に於ける如く、「野蠻なるオリエンツからヨーロッパへと移植された英雄」云々と飛躍も甚だしい論評を下してしまつた以上、後はもう、かうとでも纏めるしかあるまい。けれどもこれは、豫め設定済みのイデオロギー的公式に搦め捕られた悪しき斷定の典型であつて、コーサンは知らず、少なくともカーライルについては、批評對象を正確に捉へてゐない。何故かうなるか。「オリエンタリズム」批判者サイドにとつて、飽く迄も「西洋人」カーライルには「東洋人」マホメットを蔑む存在であつてくれなければ困るからだ。さもなくば、自分の提唱する「オリエンタリズム」理論にとつて甚だ都合が悪いからである。が、かうなると最早これは學問や批評とは云へず、大袈裟に云へば、文學・文化研究に名を借りた政治的な黨派活動とさへ呼べよう。ところで元々サイドには、カーライル即ち人種差別主義者、といふ抜き難い先入見があつたやうに思はれる。例へば、これは『オリエンタリズム』上梓後の話ではあるが、『文化と帝國主義』刊行の直前に行はれたインタヴューが或る左翼雜誌に載り、その中で、マルクス主義理論家として知られた故レイモンド・ウィリアムズの事を自分は「偉大な人間」として敬愛したけれど、『文化と社會』所收のカーライル論、あれは全く戴けない、大體かの悪名高き「黒奴問題」などといふ「人種差別的な悍し^{おこぼ}さにぞ

つとするやうな一篇」を物したカーライル、その文業の「到る處に」さういふ「人種差別的な悍しさ」を漂はせるカーライルを、一體どうしたらあんな風に讀めるのか、と語つてゐる（“OA” 23）。つまり、ウィリアムズが「文豪」と「人種差別主義者」を絡めて論じなかつた事が不満なのであり、自分は近刊書でそれをやつたと前宣傳してゐる。別にウィリアムズの肩を持つ譯ではないが、彼のカーライル論は『黒奴問題』には單に論及してゐないだけであつて、何も、有るものを無いと言ひ包めてゐる譯ではない（Williams 85:98）。然るにサイドの場合、先の⑥及びそれに續く次段落の冒頭は事實上、無いものを有ると言つてゐるに等しい。觸れない事と捏ち上げる事、知的・道義的に果してどちらが罪深いか。How can you read Carlyle the way he did? と彼は先達の讀みを批判するが（“OA” 23）、この臺詞はそつくりそのまま、ここで本稿に流用する事が出来る。勿論 he を Raymond Williams から Edward Said に讀換へて、である。「オリエントを吾々が無闇に不安がる必要は無い、オリエントの爲し遂げた事なぞヨーロッパのそれには斯くも敵はぬものなのだ」などと、一體全體どこをどう讀めば讀取れるのか。カーライルは書いてゐる。

これまで千二百年間、「このマホメットの宗教」は全人類の五分の一に當る人々の宗教であり人生の指針であり續けて來た。そして何よりも先づ、これは今なほ心の底から信じられてゐる

宗教なのである。これらアラブの民は己が宗教を信じ、それに依つて生きようと努めるのだ！ 如何なるクリスト教徒も古來、未だ嘗て、いや恐らく近世のイギリスのピューリタンだけしか、イスラーム教徒が彼等の信仰を固守する如くに己が信仰を固守しはしなかつた——全面的にそれを信じ、それを以て（時）に立ち向ひ、そしてそれを以て（永遠）と向ひ合ふ、といふふうには。（HHW 65:66）

講演のほほ締めに當るこの件りを讀めば、よほど特殊な角度から眺めるのではない限り、どうせ向うはこちらに敵ひつこないのだから「無闇に不安がる必要は無い」などといふ樂觀どころか、「慢心せるヨーロッパ人よ、このままではアラブの民に精神的に負けてしまふぞ」といふ憂慮以外の何ものも讀取れぬ筈である。先述したやうな、一般人は固より神學者までもが功利主義に傾く御時世、「蒸氣機關」に象徴される機械化・産業化の時代を、カーライルは既に十年も前から批判してゐた。「メカニズムに熟練して吾々は、外面的な事物の處理にかけては他の總ての時代を凌駕した。然るに純粹に道德的な性質に關する萬事に於ては、魂と人格との眞の威嚴に於ては、吾々は恐らく殆どの文明時代に劣るであらう」（“ST” 73）。對するにアラビアには、今なほ「心の底から信じられてゐる宗教」があり、「アッラー・アクバル、神は偉大なり」と唱へる信者にとつて、イスラームとは文字どほり「吾等は神に服従せねばならぬ」

の謂であるが、本来、クリスト教も『舊約聖書』の「ヨブ記」第十三章第十五節にあるとほり、「彼われを殺すとも我は彼に依頼よりのたまん」とて唯一神に絶対の歸依を誓ふ宗教だつた筈なのである、とカーライルは熱辯を揮ふ(HHW 49)。だが「近世のイギリスのピューリタン」も遙か昔の話で、今やイギリスもこの爲體ていたい。マホメット講演の翌日、カーライルは故郷スコットランドに暮す信仰篤き母親宛の手紙にかう認めたしんた、「吾が聴衆の中にはお偉い聖職者など凡ゆる類ひの人たちがゐました」が、「恐らく彼らのはうこそ彼よりもよほど偽物だといふ事を知らしめてやつたのです」(CL 1213839)。尤も、その「彼ら」が自覺に到つたか否かはまた別の話である。

いづれにせよ、かういふカーライルの危機意識をサイドが曲解するのは、イデオロギーの色眼鏡を掛けてゐるせゐに他ならないが、彼を論難するカーライル學者とて、己が研究對象たる人物の眞情を掴み損ねてゐるといふ點では、さしたる違ひは無い。例へばルー・ス・アップロバーツは、サイドの「政治的に歪曲された見解」に用心せよと言ひ、「サイドはこの研究領域を恥知らずにも振ち曲げてゐる」と罵る(AD 91, p. 12)。それは良いとして、では博覽強記の彼女がカーライルのマホメット論を論じた自身の結論はといふと、それはかうである。

「著名なヴィクトリア朝文學研究者」ジェフリー・テイロツ

トソンは、貴重なカーライル追想記の中で、マホメット講演に

カーライルのマホメット論を読むサイド

ついて「あれは『比較』宗教への興味關心を、生み出したとまでは言はずとも、掻き立てはした」と語る。カーライルはジェームズ・フレイザー、エミール・デュルケム、そしてミルチャ・エリアーデのための基礎を築いたのである。(10)

故アップロバーツ女史の研究書のテーマが「比較宗教の實踐者としてのカーライル」であつた以上(S)、このやうな話になるのも或る意味では仕方無いとはいへ、それにしても何とも呑氣な言ひ種ではないか。言ふも疎か、カーライルがマホメットを論じたのは無論、比較宗教學者なんぞのためにはなく、この預言者もまた眞理に觸れた英雄だと直観したからであり、そして、非クリスト教化への道を邁進する西歐社會に非常な危機感を抱いてゐたからに他ならぬ。十九世紀中葉にカーライルはマホメットを演題に選ぶに當り、「吾々のうち誰一人としてマホメット教徒になる危険性は無いので」と言つてゐたが(HHW 38)、二十世紀初頭にヒレア・ペロックは、クリスト教を棄てて「モハメッド教」に改宗した「高學歴のヨーロッパの紳士たち」の存在を記してゐる(74)。そして二十一世紀、ダグラス・マレーが紹介してゐるデイタによれば、イギリスでは「キリスト教を除くほとんどすべての宗教で信者数が増えてゐることが明らかになつてゐる」て、「昔ながらの英國の國民的宗教だけが唯一、急激に衰退して」をり、また「歐洲のイスラム教徒人口が、近年のやうな移民の急増がなかつた場合でも一定程度増えてゆくこ

と」が豫想されるのだといふ(三七、五一〇)。アップロバーツは、サイドの『オリエンタリズム』が齎した「否定的要素を總て棄て去り、「イスラームを新たに見直」さうと能天気にも述べてゐるが(『LHSE』二)、果して草葉の蔭でカーライルは、一體どんな面持で斯かるヨーロッパの現状を見据えてゐるであらうか。

【註】

(一) 現在では「ムハンマド(Muhammad)」とらゝ表記が標準とされる。カーライルやキボンは「Mahomet」と、後出のシロツクやサイアードは「Mohammed」と綴つてゐるが、カーライルを中心に論ずる本稿では特段の理由が無く限り「Mohammad」と記す事にする。

(二) 因みにフリーの驚歎について、英語版『ウイキペディア』は異説を紹介してゐる。それに據ると、件のラテン語文獻はマラビニア語の原典を誤譯して「[Ali] was called upon, while he was washing him [the Prophet], to raise his gaze to the sky」と解するのが正しく、*“Death erection”*。

(三) 邦語文獻からの引用時に表記を變更した箇處あり(以降も同様)。なほ、ダンテ「地獄篇」にはカーライルの弟ジョンによる英語散文逐語譯がある。参考までに當該部分を引いておく。

Even a cask, through loss of middle-piece or cant, yawns not so wide
as one I saw, ripped from the chin down to the part that utters vil-
est sound: Between his legs the entrails hung: the pluck appeared,
and the wretched sack that makes excrement of what is swallowed.
While I stood all intent on seeing him, he looked at me, and with his
hands opened his breast, saying: “Now see how I dilacerate myself
See how Mahomet is mangled! Before me Ali weeping goes, cleft in

the face from chin to forehead. And all the others, whom thou seest
here, were in their lifetime sowers of scandal and of schism: and
therefore are they thus cleft. [...] (293-94)

(4) 『英雄崇拜論』は單行本出版の前年に行はれた全六回の講演を基にしてゐる。開催日と演題はそれぞれ以下の通り。

・ Lecture I [Tuesday, 5th May, 1840] The Hero as Divinity: Odin.
Paganism: Scandinavian Mythology.

・ Lecture II [Friday, 8th May, 1840] The Hero as Prophet: Mahomet:
Islam.

・ Lecture III [Tuesday, 12th May, 1840] The Hero as Poet: Dante:
Shakespeare.

・ Lecture IV [Friday, 15th May, 1840] The Hero as Priest: Luther: Ref-
ornation: Knox: Puritanism.

・ Lecture V [Tuesday, 19th May, 1840] The Hero as Man of Letters:
Johnson, Rousseau, Burns.

・ Lecture VI [Friday, 22d May, 1840] The Hero as King: Cromwell,
Napoleon: Modern Revolutionism. (HHW 3, 37, 67, 99, 133, 169)

(5) イスラームの聖典は現在では「クルアーン」(*Quran*)と表記される事が多いけれども、本稿では特段の理由が無い限り、従來の綴り *Koran* を用ゐるカーライルに倣ひ、「コーラン」と記す。

(6) 「第二講に關する限り」と記したのは、ダンテとシェイクスピアを扱つた第三講「詩人としての英雄」では、二大詩人に比してマホメットが確かに貶められてゐるからである(85, 96)。しかしながら、これは天才的な「偉人」同士間の高次元に於ける多分に抽象的な比較論であり、イギリス人一般に比してインド人一般を劣等視するマコーリーの實務的な「覺書」とは所詮、同日の談ではない。またデイヴィッド・ソーレンセンに言はせれば、ドクマティックな一神教に對して近代の知識人たるカーライルがどうしても拭ひ切れなかつた懷疑の念、それによつて吟味の刃がアラブのマホメッ

トのみならず、第六講「帝王としての英雄」に於ては崇敬する清教徒オリヴァー・クロムウェルにまで向けられたのであり、洋の東西を問ふものではない、といふ事になる(88)。それゆゑ「野蠻なるオリエントからヨーロッパへと移植された英雄」云々も、ことカーライルのマホメット論に關する限り、サイドの妄想と云ふ他は無い。

(7) 参考までに三浦雅士の文章を引いておく。今は亡き雑誌『英語青年』のV・S・ナイポール特輯號に掲載されたものである(その後、單行本に收められたかどうかは不明)。

だが、『インド、傷ついた文明』『イスラム紀行』さらに『イスラム再訪』を読んで感動を覺えたものとしては、このサイドの『イスラム報道』に於ける批判的な「見解に與するわけにはいかない。ナイポールは確かにイスラムを批判的に見てゐるが、それはこの作家があくまでも生身の人間に關心をもつてゐるからである。人間に取り憑いた觀念ではなく、觀念に取り憑かれた人間のように關心をもつてゐるからだ。先祖をもち、家族をもち、仕事をもつて生きてゐる人間にとつて、イスラムは救済であると同時に、いやそれ以上に、苦痛であることが多い。さう感じざるをえなかつたからなのだ。たとへばイスラムにおける女性の地位を見てみるがいい。

サイドとナイポールでは世界を眺める視線が違ふのだ。サイドは出身地こそパレスチナでありカイロだが、自傳に明らかなやうに、ほとんど生粹の西洋人と言つていい存在だ。趣味も教養も典型的な大學教授、知的に洗練された、それこそ苦惱においても洗練された知識人、大學生に大いに人氣がある知識人にほかならない。

トリニダード出身のナイポールは違ふ。英國の政策の一環でオックスフォードを卒業したといへ、BBCでアルバイトをしながら著述業者となり、あとは筆一本で生きてきた男である。出來合ひの主義主張を奉じてゐるわけではない。信じてゐるのは自分の感受性だけだ。

カーライルのマホメット論を読むサイド

主義主張つまりイデオロギーが前面に出てゐるのはサイドのほうであつて、ナイポールのほうではない。

サイドの『オリエンタリズム』を非難しようとは思はないが、西洋の通俗的なイデオロギーを批判したこの本が、同じやうに通俗的なイデオロギーの域を出てゐないのは必然である。構造主義が西洋中心主義を批判して以來、誰もがうすうす感じてゐたことをフランス文學の畑で明言しただけの、時流に乗じた本にすぎない。(三二六)

【引用文献】

- apRoberts, Ruth. *The Ancient Dialect: Thomas Carlyle and Comparative Religion*. U of California P, 1988.
- . “The Lore of Heaven. The Speech of Earth: Carlyle, Mahomet, and Islam.” *Carlyle Studies Annual*, no. 23, 2007, pp. 7-12.
- Balloc, Hilaire. *The Great Heresies*. 1938. Ignatius Press, 2017.
- Carlyle, John Alifker]. translator. *Dante's Divine Comedy: The Inferno*. 1849. By Dante Alighieri. HardPress Publishing 2012.
- Carlyle, Thomas. *On Heroes; Hero-Worship, & the Heroic in History*. 1841. Edited by Michael Klenne[neth] Goldberg, et al. U of California P, 1993.
- . “Signs of the Times” 1829. *The Works of Thomas Carlyle*. Centenary Ed. Vol. 27, edited by Henry D[uff] Traill. Chapman and Hall, 1899, pp. 56-82.
- Carlyle, Thomas, and Jane Welsh Carlyle. *The Collected Letters of Thomas and Jane Welsh Carlyle*. Edited by Charles Richard Sanders, et al. Duke UP, 1970.
- “Death erection.” *Wikipedia*. Wikimedia Foundation. 6 Oct. 2019. en.wikipedia.org/wiki/Death_erection. Accessed 11 Nov. 2019.
- Garnett, Richard. *Life of Thomas Carlyle*. 1887. Walter Scott, 1895.
- Gibbon, Edward. *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*.

- 1776-88. Vol. 5, edited by [John] Blagden] Bury. 2nd ed., Methuen, 1901.
- Lentin, Antony, and Brian Norman, editors. *The Decline and Fall of the Roman Empire*. By Edward Gibbon, abridged ed., Wordsworth Editions, 1998. *Google Books*, books.google.co.jp/books?id=yv1YUqge-JMC&printsec=frontcover&hl=ja#v=onepage&q&f=false. Accessed 11 Nov. 2019.
- Said, Edward [Edward]. *Orientalism*. 1978. 25th Anniversary Ed., Vintage Books, 2003.
- . "Orientalism and After: An Interview with Edward Said." Interviewed by Anne Beezer and Peter Osborne. *Radical Philosophy: A Journal of Socialist and Feminist Philosophy*, no. 63, Spring 1993, pp. 22-32. *Radical Philosophy Archive*, www.radicalphilosophyarchive.com/issue-files/rp63_interview_said.pdf. Accessed 11 Sept. 2020.
- Sorensen, David R. "The religion plus digne de la Dignite": A New Source for Carlyle's Essay on Mahomet." *Carlyle Studies Annual*, no. 23, 2007, pp. 13-77.
- Spellberg, Denise A. "From What Jefferson Learned—and Didn't—from His Qur'an." *The Qur'an*, edited by Jane McAuliffe, Norton Critical Editions, 2017, pp. 634-39.
- Watt, William] Montgomery. "Carlyle on Muhammad." *The Hibbert Journal: A Quarterly Review of Religion, Theology and Philosophy*, vol. 53, no. 3, Apr. 1955, pp. 247-54.
- Williams, Raymond. *Culture and Society 1780-1950*, 1958, Pelican Books, 1963.
- 井筒俊彦『井筒俊彦全集』木下雄介・他編、慶應義塾大學出版會、平成二十五年～二十八年。
- 井筒俊彦譯『コーラン』下巻、岩波文庫、昭和三十九年改版。
- ダンテ・アリギエーリ『神曲 地獄篇』平川祐弘譯、河出文庫、平成二十年。
- マレー、ダグラス『西洋の自死——移民・アイデンティティ・イスラム』町田敦夫譯、東洋經濟新報社、平成三十年。